

贈る言葉

引用	人文学論集. 2021, 39
その他のタイトル	Retirement Messages and Wishes
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017288

大平先生から学んだこと

川 部 哲 也

私にとって、大平先生は「師匠」である。そして、人をあっと言わせる多くの特技をお持ちである。颯爽と一輪車に乗る姿、太極拳をなさっている姿は、大阪府立大学にいる者は必ず一度は目にしたはずである。それだけでも驚きであるが、私が本当に驚いたのは、次の3つである。

まず、人の趣味をよく覚えていらっしゃる。私はラーメンが好きなのであるが、それを知った大平先生から、会うたびにお勧めのラーメンを教わった。「あの店のラーメンは絶品です」と、実に美味しそうに語られるので、その話を聞くだけでも幸せになったものである。しかも、その話に出てくるのは、私の知らない店ばかりであったから、きっと先生は常に自分の足（と舌）を使って探究なさったのであろう。その情熱にも驚かされるが、それより驚いたのは、ちらっと私が言った「ラーメンが好き」の一言を、ずっと覚えていてくださったことである。

2つめは、即興で最高のパフォーマンスをなさることである。大学での避難訓練の際に、ご一緒した時のことである。避難訓練では館内放送で「訓練です。今、地震が起きました」というアナウンスをすることになっている。それは台本があり、日本語と英語でその台詞が書かれてあった。避難訓練を担当する教員の間から、「この建物には中国からの留学生も多くいるので、中国語も必要ではないか」という声があがった。もしかしたら、その声は半ば、台本の不備を冗談半分に笑い飛ばす意図だったのかもしれない。しかし、大平先生の行動は迅速であった。「わかりました」と、即興で中国語のアナウンスをきわめて流暢に放送されたのは、忘れられない出来事である。その場にいた全員が驚き、和んだ空気が流れた。

3つめは、コミュニケーションの気持ちよさに驚いた話である。大平先生とは会議でご一緒することも多かったのであるが、会議での議論が極端な方向に走っていった時に、ずっと現実的な路線に戻される一言を発する姿が、とても印象に残っている。「理想的にはそうかもしれませんが、例えばこんな案はいかがでしょう」と、控えめに提案なさる大平先生。人とぶつからず、争わず、場の均衡を保つ姿に感銘を受けたことが何

度もあった。そして、これは会議の場に限らないのであるが、良い案が出た時には、大平先生ははっきりと褒める。「それは素晴らしいアイデアです」と。私は一度、この言葉を大平先生にいただいて、ちょっと涙が出そうになった。大人になって、こんなに真正面から褒められたことはなかったからである。大平先生のすごいところは、掛け値なしに心から人を褒めることができるという点にある。このような褒め方ができる人に、私は初めてお会いしたように思う。私も大平先生のように、真っすぐに人を褒められる人間になりたいと日々精進しているが、まだまだである。

驚いた話を書き連ねてきたが、私が大平先生から学んだことは、いずれも「他者への尊敬の念を真っすぐに持ち続けること」なのかもしれない。それができるためには、普段からの鍛錬により、いつでも最高のパフォーマンスを（しかも即興で）できる心身を整えておく必要があることも、学んだように思う。

「師匠」である大平先生に、私は多くを学んだ。そして、今も学び続けている。

大平先生、今までありがとうございます。

大きな大平先生

池内 早紀子

私が、はじめて大平先生の授業を受講することが出来たのは、社会人入学をした2015年4月であった。

府立大学では、授業公開講座が行われており学生以外の市民も受講することが出来る。実は入学するより5年ほど前に、まだ見ぬ大平先生の講座の受講を希望して応募したのだが、見事ハズレクジであった。まだ見ぬと言っても受講しようと思う位なのだから、そこは大学のホームページを調べ、お写真で先生のお姿はしっかりと拝見していた。そして小学生を師として会得した一輪車乗りの達人であることも知っていた。その年の後期に、運良く大形先生の講座を受講することが出来た。大形先生のご厚意により研究室に入り浸ることとなり、そこで初めて大平先生を間近に拝見することになる。いままで遇ったことのないような、とても不思議な感じの先生だった。

次にお目にかかったのは、入試の試験会場である。面接の試験官として大平先生は、分厚い書籍を一冊下げて登場された。その書籍、確か本草綱目だったと思う。内心焦る私に先生は、そこに印をつけ、「訳して下さい。」とおっしゃった。私はどうにか答えた。試験の後、厳しそうに見えた大平先生の中にキラッとした優しさを感じた。私の答

えられそうな所を思案して出題して下さったのだ。

やっと大平先生の学生となれた私は、厳しく見えるけど優しい、今時の言葉でいう「ツンデレ」か。その大きな優しさの下で、色々なことを教えて頂いた。

授業中の思い出もいっぱいある。最初の年は、ピンインまで振って頂いているのに、それをローマ字読みしてしまうというひどさで、先生に「発音はしなくて良いですよ」と言わせてしまったこともある。よくぞ辛抱して下さったものだと思う。また古典籍を現代語訳していた時のこと、先生が大変情緒的な訳をされた。図々しい私は「先生、それ原文にはないですけど、妄想じゃないですか」と臆面もなくいつてしまった。先生は「文学部ですから、」とお答えになった。吉川幸次郎先生のお手伝いをされていたという大平先生の学生時代が頭に浮かび私の方が妄想してしまった。先生は、ずっと青年で、少年でいらっしやる。

時々、「今日は外にお茶に行きましょう」と言って、私たち学生を白鷺門近くの喫茶店につれて下さった。思い出すと多すぎて書き切れない。

今回も、この『人文学論集』の原稿を執筆している時に、先生のお部屋に伺った。「これ、差し上げます。」一冊の本をくださった。それはテーマと大変関連のあるものであった。すぐに引用させていただいた。やはり、何もおっしやらないけど優しい。

時は来る。ああ、ツンデレのあの姫のように、私たちから離れて行かれるのだろうか。

先生は『中華文人の生活』という本に「日々と四季の健康法」という論考を書かれています。退休後も益々健康で、いつまでも私たち学生を見守り導いていただきたい。

大平先生に贈る言葉

佐々木 博 光

「おおひらと書いておおだいら」、それがいつものお約束であった。「おおひらと書いておおだいら」、先生と一緒に教育運営委員を務めた4年間、年度初めの自己紹介で必ず聞いた台詞である。わたしは擦り込みなどという学術用語の有効性には懐疑的である。しかしこれだけは違った。ある日の授業で、わたしはかつての首相の名を誤っておおだいらと云ってしまった。そしてこともあろうにその誤りに気づいたのは、授業後に研究室に戻り一息ついているときであった。恐るべし、「おおひらと書いておおだいら」。わたしのなかで、しばらくはおおひら族が復権することはなさそうだ。

大平先生との出会いは、三大学統合後であった。わたしたちは新生の人間社会学部で、

文化形成論コースの一員として同僚になった。それ以後も大学は何度も改組の波にさらされたが、大平先生とわたしはつねに同じ部署に配属された。そのように歩みをともした方は大平先生が最後で、時代の変化を実感している。

大平先生のご専門は中国文学である。文学研究者らしく語学には厳しい方でしたが、学生には優しい方でした。言語に対して並外れた関心をお持ちで、中国語だけでなく、ヨーロッパ言語にも単なる関心以上のものを示された。フランス語やイタリア語のようなロマンス語はもとより、ドイツ語や、ラテン語のような古典語にも触手を伸ばしておられたように思う。わたしは会議でお会いしたさい、また廊下ですれ違いざまにドイツ語で話しかけられることがあった。分野ガイダンスで学生を前にして自己紹介を流暢な中国語でなさっているお姿を、わたしはよく羨望のまなざしで眺めたものである。外国語はどれをとっても読み書き以上のことができるようにならなかった（人生のセカンドキャリアでまだできるようになる可能性があると思っています）わたしには、大平先生の存在は眩しいかぎりであった。例のお約束も、一度各国語でやってもらいたいものである。

大平先生が大学を去られる。しかし非常勤講師として、しばらくは大学にお見えになるそうである。おおだいらロスを和らげるためにも、これは是非とも必要な措置である。これからもすれ違いざまにドイツ語で話しかけてくださることを期待しております。大平先生、本当にご苦勞様でした。